

地理的思考と地理的想像力に関する一考察

大 嶽 幸 彦*

(平成4年4月10日受理)

要 旨

本稿は地理的思考と地理的想像力の問題に関し、内外の文献を参照しつつ、若干の考察を試みたものである。資本主義下での生産の効率化・加速化の促進に対応するかの如く、地理学における著書・論文の刊行間隔についても短縮され、それらの数も増加している。従って、研究がある型にはまって行われ、研究に不可欠なアイデアや独創性が不足しがちとなる。本稿は研究に必要な地理的思考と地理的想像力の困難さの要因と、それらへ到達するプロセスを考察した。

KEY WORDS

Geographical Thinking	地理的思考	Geographical Imagination	地理的想像力
Space	空間	Place	場所
Boundary	境界	Frontier	辺境

1 はじめに

筆者は既に地誌学書に関し、地誌学書は一人の地理学者の到達した地理学観を基にまとめるべきである¹⁾ことを述べたことがある。その意味するところは、研究者があまりにも機械的に調べて書きまくるといった、昨今の風潮に反省を促すためにあった。一般に、どの学問分野においても研究には理論を主としたものと、実証を主としたものがあることは、よく知られた事実である。前者においては、一般化、法則化、定理の発見が肝要であり、追試的研究はあまり評価されないと行ってよい。後者にあつては、理論を手本に言わば例題を数多く解くこと、実証することが必要とされる。実証的研究からも帰納法により理論構築が勿論可能であるが、実証例が多くなくては不可能に近い。かくして、実証的研究を主体にすると、論文の洪水を招くことになるのである。喩えて言えば、夏の夜空に一瞬の輝きと音響を残してたちまち消えてゆく打上げ花火の如く、どの学問分野においても著書・論文の大洪水であり、一人の能力では、それら知見の集約をはかることさえ不可能な状況になっている。しかも、早く！早く！数！数！という声なき声研究者を日夜追い立てている。かような研究効率が強調されるだけに、以下、展開するような地理的思考と地理的想像力に関する考察が逆に必要となってくるのである。何故、本稿でそれらを論じてみようと考えたかに関しては、本論の展開の中で次第に明らかにされよう。

* 社会系教育講座

第二次世界大戦後における社会科学隆盛の下に、経済学を中心にした諸学のごった煮的思考の中で、地理学とは何か、地理学者は何をすべきかも深くは考えず、細かな事象のいわゆる科学的解明にのみ突き進む時、アメリカ合衆国にみられるような地理学教室閉鎖の問題も、財政上の理由と共に起ってくるのである²⁾。合衆国においては、「地理学は小規模・周辺の学問分野である。この科目は、この国の高等教育機関のわずか38%を与えられているだけである。地理学者は、同国の大学教員の1%を占めるにすぎない³⁾」。日本の場合よりも大学教員の比率が後述するように若干高いとはいえ、合衆国においても地理学者の数の相対的少なさと、科目として地理学の置かれていない大学の多さには驚かされる。合衆国では学士を授与する2,000の短大・大学のうち、地理学士を出すのは約300である⁴⁾。これは時代や産業界の要請に合わせて新興学科の定員増が続く中で、古代ギリシア以来の伝統を持つ地理学の相対的地位の低下を物語っている。筆者は、日本の高等教育における地理学者の数が千人に充たないことを、日本地理学会会員名簿の分析から指摘した⁵⁾が、全ての学問分野に占める地理学者の比率は次の通りである。1988年5月1日現在の教員数は、大学が118,500人、短大が19,300人、高専が3,900人で合計141,700人となる。その内、筆者の概算した大学等に勤務する地理学者の数は860人であったゆえ、0.6%を占めるに過ぎないのである(矢野一郎監修、1989年版日本国勢図会により算出)。

1.1 研究における独創性の不足

筆者は拙著『国際化時代の地理学』の中で、1980年に「日本はまだ相変らず文明開化の時代であるから、欧米の新しい研究分野の先端を素早く取り入れ、追試をして論文を次々に量産してゆけば、いち早く狭い領域の専門家になれる⁶⁾。」と述べたことがある。専門家を殊更重んじる我が国の風潮を受けて、事態は地理学研究の拡散・細分化を伴いつつ、より悪化しているように思われる。

ところで、本稿で問題にするテーマの一つ、すなわち研究するに当り深く考えないということは、研究がある型にはまって行われていることから生ずる。既に、権威ある学会誌等で承認された研究のひな型に沿って論文をまとめてゆけば、遅かれ早かれ掲載が許可される。しかしながら、比較的新しく未検証の分野の研究においては、L. S. Bourneの指摘するように拒絶される確率が著しく高い⁷⁾のである。型にはまった研究は同じことの繰り返しであるから、比較的楽である。一方、未知の方法、テーマを扱かうと絶えず不安であり、論文に結実するかどうか定かではないし、評価されるかどうか全くと不明である。また、へたの考え休みに似たりと言われる如く、長時間をかけて考えた事柄が目に見えた形で残るとも限らない。それゆえ、次第に独創性の不足した相も変わらぬ研究が続くのである。A. バッチマーのインタビューの中で、スウェーデンの地理学者、William William-Olssonは研究に必要な創造性に関して、次のように述べている。「価値を測る物差しとしての成功を願わないこと、利潤への渴望の無いことが、創造性への鍵である。それは現実と空想、すなわち想像力に根ざしている⁸⁾。」地理的創造性ないし地理的想像力に関しては後に検討する。いずれにしても、人よりも数多く著書・論文を書くことが、研究者間の競争に勝つことであるのは、あらゆる学問分野での暗黙の了解事項であるといつてよい。

1.2 研究成果刊行の加速化

学問の世界における研究の専門化・細分化もよく知られた事実である。資本主義下での生産の効率化・加速化の促進に対応するかの如く、著書・論文の刊行間隔についても短縮され、しかもそれらの刊行数が急増しているのである。例えば、D.ハーヴェイの述べるように、「そう遠くない昔、一生に2冊以上の著書を出版することは、野心的すぎると考えられていた。今日では、指導的な学者は生きている証しに、2年毎に1冊の著書を出版しなければならないようである⁹⁾。」と。つまり、専門家 Professional としての地理学者は書いて、書いて書きまくることが要求されるのである。研究に不可欠なアイデアの生産に関しても、スピード・アップがなされているのである。従って、じっくりと考えを練って論議を進めるよりも、似たような問題設定でフィールドを替え、次々と論文を量産するか、海外からの新しい研究思潮を導入し、それを紹介かつ応用した論文を数多く書いていくことになり勝ちなのである。

研究の独創性¹⁰⁾を生み出すには、インスピレーション(靈感)が必要なこともよく知られている。その点に関し、マックス・ウェーバーは既に1919年に次のように述べている。「如何に情熱があり、またそれが如何に深く且つ純なものであっても、だからと言ってそこに出る筈のない結果を無理にも出すといふ譯には行かない。勿論情熱は所謂「靈感」を生み出す地盤であって、この「靈感」といふものは学者にとって決定的なものなのである。然るに近頃の若い人達は、兎角學問がまるで實驗室か統計室で取扱ふ計算問題のやうなものになって了ったかの如く考へる。丁度「工場で」何か製造するときのやうに、學問は最早「全心」を傾ける必要なくただ機械的に頭を働かすだけでやって行けるものになって了ったと、彼らは慨歎するのである¹¹⁾。」論文作成において、データの採取や解釈には熱心であっても、それがそれぞれの学問体系の上で如何なる意味を持つのか、また新たに何を積み上げたのか考えることの少なさを想起してみる必要があろう。データから詳細な図表を作成し、考察を加えれば、それで研究は完了したと安心してしまふことが多いのである。しかも科学にとって、重要な想像力、創造性と洞察力は省略されるのである¹²⁾。次に、本稿の主題である地理的思考と地理的想像力へのプロセスを考察してみよう。

2 地理的思考と地理的想像力へのプロセス

本題に入る前に、地理的思考と地理的想像力は一般に何故困難であろうか、また人びとがあまりそれらを意識しようとしないのであるか、以上の点を考察することから論議を進めたい。

2.1 地理的思考と地理的想像力の困難さの要因

筆者の考えでは、以下の4点に整理される。第1に考えられることは、人びとの生きられる空間 *espace vécu* は非常に狭く、この地球上では豆粒の如き点的存在であり、仮にいくつかの空間を渡り歩いたとしても、その空間は不連続の点・点・点の存在であって、途中は決して線にはなりきれず、単なる通過点に終わってしまうことが多いことである。谷岡武雄も日本人の非地理学的考え方を単線型連続の思考様式の成せるものととらえた上で、次のように言う。「日本は面的ではなく点的存在であり、その歴史は点の軌跡にほかならない。¹³⁾」と。換言すれば、人びとのこだわりの空間がたとえいくつか存在したとしても、それぞれ独立した空間として存続

し、途中が決して線としてつながらないためネットワーク化も困難である。そのため、地理学が対象とする地球上の一部を切り取り、さまざまな事象の面的拡がり把握し、理解させようとしても容易ではないのである。第2に、地理学が対象とする地球上の諸事象に関し、書物以外にルポルタージュ、フィルム、テレビニュースといったマスメディア等から日常的に知識として断片的にはかなり知りえるが、この情報過剰な今日では次々と忘れ去られることである。しかも、いざ地理的思考や地理的想像力を必要とする時に役立たないことが多いし、知識に関しては必要に応じて百科事典・著書等の類を見れば済むのである。また、行ったことのない土地、経験したことのない事象についての感情移入は極めてむずかしいことも事実である。例えば、橋 南谿著『東西遊記』の中にも、沖縄の婦人に、見たことの無い水変じて雪・氷となる風土をわからせる困難さを述べた箇所があり、拙著『旅と地理思想』で取り上げたことがある¹⁴⁾。第3に、地理学がよく利用する統計の数値は、事象の説明 explanation の際、客観的・実証的ではあっても、具体的なイメージのわきにくいことが多いことである。研究の細分化につれて、分析がより精緻となったとしても、反って事象の解明を複雑化しわかりにくくさせている。また、図化 mapping は地理的想像力をかき立てる1つの有効な方法ではあるが、図の読み取りの訓練を受けていないか、そもそも図そのものに興味のない世人にはあまり訴えるところがないのである。第4に、地理学者自身の研究が専門化・細分化しているがゆえに、地球上の事象を総合的に把握しようとする地理的思考を取らなくなってきたことである。この点に関しては、後に検討したい。

2.2 地理的思考と地理的想像力形成へのプロセス

さて、本稿でたびたび言及して来た地理的思考と地理的想像力は如何にして形成されるのだろうか。これを一言で要約して言えば、幼少の頃からの地理的好奇心¹⁵⁾を大事に育て、発展させてゆくことにあろう。この点に関し、ピーター・グールドは次のように説明している。「仮に地理学を専門にしている人間に尋ねてみたならば、彼らの多くが子供の頃、何時間も地図を眺めては、そこに表わされた形状、河川、海岸、山岳等について、あれこれ思いを巡らし、水平線の彼方には一体何があるのだろうかと考えていた、と教えてくれるだろう¹⁶⁾。」この種の傾向は地理を趣味として他の分野に進んだ者にも言えることであり、見えぬものを想像して描写するという地理的想像力といえよう。旅に出て鋭い観察眼があり、記録・日記を丹念に取れば、如何に地理学者の目を発揮したかに関しては、拙著『旅と地理思想』の中で詳しく論じた点である。ここで、地理的好奇心を発展させ、地理学親にまで高めた1人の地理学者の例を検討してみよう。

人間主義の地理学 Humanistic Geography の旗手の1人であるイーフォートゥアンは「1つの地理学観」と題した論稿の中で、1940年代後半と1950年代前半に流行した地理学の定義から始めている¹⁷⁾。すなわち、地理学とは人びとのホーム(住まい)としての地球の研究であると。従って、どんなに初歩的であっても、ホームの本質について言葉、スケッチ、地図で表現されておれば、地理学である¹⁸⁾と。以上は、地理学を人間活動の舞台である地球上の諸事象の研究とする定義に近く、しかも極めて粗い定義であることに気づかれよう。そして、地理学の定義中の3つの鍵概念、地球、人間、ホームの順で考察を進めている。人間に関する箇所では、現在の地理学者が人間の心理的次元に興味を示していることを指摘している。強制と自由と題した箇所でも、興味ある知見が述べられているが、人間が如何に自由でないか指摘した後で、次

のように述べている。「自己の世界のまわりに、境界、物質的なもの、概念的なものを課すのが人間である¹⁹⁾」。地理学の教養と題した箇所では、地理学は或る人びとがたまたま持つ伝統、教養、世界観、気質でさえあると述べている。地理的教養にとって、如何に場所や人びとが短い距離の中でさえ著るしく異なるか知ることは重要である。最後に、1人の研究方向がどんなに演繹的で抽象的であっても、地理学者はニュートンの単一見解や1経済学者には決して満足してはいないと結んでいる。地理学研究における自然科学的研究手法が人文地理学の研究にも踏襲され勝ちであったこと、マルクス主義の立場からの分析・解釈・現状批判の研究が流行したことを想起されたい。

以上、トゥアンの「地理学観」に関する論稿を要約すると共に筆者の考えも併せ述べたが、地理的想像力は幼少の頃は誰にでもあるものであり、大人への過程でそれを意識的に伸ばして来たか、或いは次第に忘れ去って来たかの違いにすぎないと思われる。谷津栄寿は1940年より1965年までの日本地形学について私見を寄せ、地形学について、あるいは広く科学についての哲学の欠如を指摘して次のように記している。「日本地形学者集団には奇妙な思想があった。方法論や思想は論文の行間に書けというのである。つまり、述べるなということである。したがって、地形学はいかにして成立するか、根本命題は何であるか、地形学の理論の革新・革命とは何なのか、それはいかにして形成されるものか、などについての深い考察がなされていない²⁰⁾。」と。これと関連することであり、間接的にはあるが、或る教官が、誰某はあまり考えないから研究が早いと言っていると聞いて驚いたことがある。谷津の批判した悪しき伝統は今なお健在と言うべきか。要するに、或るテーマについて深く考えることをせずに資料集め・データ採取を始め、既成の論文を手本にして書き進めてゆけば、間違いなく論文らしきものは出来あがるのである。しかしながら、論文作成に必要な独創性は一体どこへ行ってしまうのか。論文に論議や独創性は必要ないと仮定すれば、機械的に調べて書いた単なる調査報告にとどまってしまう、冒頭に述べたいいわゆる論文の大洪水を招くことになるのである。独創性の問題に関しては、既に別稿で考察を試みたことがある²¹⁾ので、ここで再度は触れない。

3 おわりに

本稿は地理的思考と地理的想像力の問題について、内外の文献を参照しつつ、現時点で若干の考察を重ねてきたものであり、今後も継続して考察を進めてゆくべき課題の一つと考えている。

長年、地理学の研究や教育にたずさわって来た者や、地理を教え始めたばかりの教師が「地理学とは一体何か、今だもってわからない」と言うのをよく耳にしたことがある。勿論、何ももってわかったと判断するかに関しては、哲学史上の長い論争があり、実は容易な問題ではないことを認めるのにやぶさかではない。それにしても、前者にあっては、地理学観の形成を怠ってきたか、はたまた単なる気取りのポーズで言っていることが多い。後者については、謙遜して言っているとも取れるが、むしろ不勉強をさらけ出しているといえよう。地理学とは何か、個人の研究生活・教育活動のそれぞれの時点で立ちどまって考えて来れば、何らかの地理学観を持ってたはずであるからである。

ところで、一体全体、地理学や地理学者に何が期待できるであろうか？ 筆者が考えるに、地

地理学自体が有効なのではなく、長年、地理的想像力を働かせ地理的思考を積んだ個人個人の能力の開発、活用の如何にかかわっているのである。それは、或る意味で名人芸を要求されるものではあるが、相対的に数の少ない地理学者には、一騎当千的な能力の開示が求められているのである。なお、雑誌「地理」第34巻、第4号、1989年は、地理学者の社会的活動アンケート調査結果を掲載している。最後に、地理学に求められるものを、ポール・クラヴァルに做って言えば、次のようになろう。「カント以来——そしておそらくはライプニッツ以来——地理学に関心を示した人たちが、すべて一致して帰結した基本原理が見出される。地理学が統一性を見出すのは、世界にアプローチするし方、それをながめ、それを分析するし方においてなのである²²⁾」。それへの鍵概念となると思われるのは、空間、場所、辺境と境界という概念である²³⁾が、地理学者はこれらの概念を深く考察し、応用をはかるのも、将来にわたる多数の研究動向の中での1つの方向²⁴⁾を成すものであろう。本稿は地理学の領域を中心に論議を進めて来たが、一部、研究全体にわたる問題に関しても、非力を省りみず言及したことを申し述べておきたい。

注

- 1) 大嶽幸彦『地誌学研究法序説』大明堂、1989年、p. 11
- 2) 野口泰生「ミシガン大学地理学科閉鎖の背景(一)(二)(三)」地理30巻1～3号、1985年
N. Smith「“Academic War Over the Field of Geography”: The Elimination of Geography at Harvard, 1947-1951」A. A. A. G., Vol. 77, No. 2, 1987
「合衆国の名門大学において地理学科が存在しないこと自体、地理学の学問的評価の低さの表われであり、1960年前後に名門大学であいついで地理学科が閉鎖されたことは、地理学が学問として存亡の危機にあったといえよう。」と杉浦は述べている。
杉浦芳夫「Ackermanとアメリカ地理学の「体制化」——計量革命に関する一考察——」地理学評論、Vol. 60 (Ser. A), No. 5, 1987, p. 334
- 3) 石川義孝「アメリカ地理学界の一側面」奈良大学文学部地理学教室編『地理学の模索』所収、地人書房、1989年、p. 114
- 4) S. Hanson「Reflections on American Geography」Geogr. Review of Japan, Vol. 64 (Ser. B), No. 2, 1991
ハンソンは合衆国における地理学の“ホットな題目”として、地球の環境変化、経済的・社会的・政治的変化、多文化主義と国際研究、地理情報システム (GIS) の4点を挙げており、それらが互いに関連する事を指摘している。
- 5) 大嶽幸彦「人文地理学における論文作成への一つの思考方法」上越教育大学研究紀要、10巻1号、1990年、p. 232
- 6) 大嶽幸彦『国際化時代の地理学』大明堂、1980年、p. 11
- 7) L. S. Bourne「On Writing and Publishing in Human Geography: Some Personal Reflections」M. S. Kenzer ed. 『On Becoming a Professional Geographer』Merrill, 1989, p. 109
研究の当初、計量革命に身を投じたことのあるD. ハーヴェイは、次のように投稿が拒絶された事情を述べている。
「驚いたことに、机の引出しが、未発表の論文と、どこにも発表できない論文とでいっぱいになっただけだった。私は、これらの論文の掲載を拒否した何人かの眼識力のある(おそらく

くは偏見に凝り固まった)編集者たちに感謝せねばならない。というのは、疑いもなく、彼らのお蔭で、私の学問的評判は未完成の破滅から救われたのだから!」

デイヴィッド・ハーヴェイ著・松本正美訳『地理学基礎論』古今書院, 1979年, p. xiii

- 8) A. Buttimer 『The Practice of Geography』 Longman, 1983, p. 163
- 9) D. Harvey 「Between Space and Time: Reflections on the Geographical Imagination」
A. A. A. G., Vol. 80, No. 3, 1990, p. 431
- 10) 創造性については、次の文献がさまざまな面から分析を試み、参考となる。
R. J. Sternberg ed. 『The Nature of Creativity』 Cambridge Univ. Press, 1988
創造性とは突然の啓示というよりもむしろ熟考と発見のゆっくりした進化のプロセスとみられている(同書, p. 4)。
- 11) マックス・ウェーバー著・尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波書店, 1936年, p. 25
- 12) E. Relph 『Rational Landscapes and Humanistic Geography』 Croom Helm, 1981, p. 138
- 13) 谷岡武雄『地理学への道』地人書房, 1973年, p. 44
- 14) 大嶽幸彦『旅と地理思想』大明堂, 1990年, p. 17
- 15) 地理的好奇心について、プレボは次のように指摘している。
「空間の中に入ると、それを理解しないで済まそうとしたり、解釈しないでもできない。したがって、地理学が必要になる。時に、写真機やテレビ・カメラ、旅行ガイドを持ち、ノートをとったり、スケッチをする。景観や現象間の結びつきを説明できなくても、居場所がわかり、ルポルタージュを書く。そうこうするうちに、地理的好奇心が目ざめるのである。」
ヴィクトール・プレボ著・大嶽幸彦訳『地理学は何に役立つか』大明堂, 1984年, p. 98
- 16) ピーター・グールド著・杉浦章介・二神真美共訳『現代地理学のフロンティア(上)』地人書房, 1989年, p. 44
- 17) Yi-Fu Tuan 「A View on Geography」 The Geographical Review, Vol. 81, No. 1, 1991
- 18) この点に関しては、次の著書・論文が参考になる。
久武哲也・長谷川孝治編『地図と文化』地人書房, 1989年
久武哲也「岩絵と砂絵の地図学」京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』所収, 地人書房, 1982年
- 19) 前掲17) p. 104
- 20) 谷津栄寿「日本地形学についての私見——とくに1940年より1965年までについて——」日本地理学会予稿集26, 1984年, p. 27
最近、理学部に所属する地理学研究者で新しい地理学、特に人間主義の地理学 Humanistic Geography を導入した研究者が、他大学へ転出したケースを二、三見聞している。その間の事情・いきさつについては知らないが、実証的研究方法に安住する研究者集団の狭量さを示す以外の何物でもないであろう。実証主義的方法によって明らかにされたとする真理が、自然破壊の進行する地球上の人類の存続や、人間の生き方に一体如何なる意義があるのか考える研究例は少ないのである。(大嶽幸彦「人間主義の地理学に関する覚書き」地理学評論, 61 (Ser. A) -1, 1988, p. 55)。なお、新たな文明のパラダイムを求めてと題し、文部省科学研究費重点領域研究「地球環境の変動と文明の盛衰」に合わせた雑誌「文明と環境」(同研究事務局発行)は、毎号、示唆に富む論文、対談、討論会記事を掲載している。
- 21) 前掲5)の論文
- 22) ポール・クラヴァル著・竹内啓一訳『現代地理学の論理』大明堂, 1975年, p. 283

次の論文も参考となる。

- H. Isnard 「La géographie à la recherche de son unité」 Ann. de Géogr. N° 522, 1985
 23) 前掲 8) p. 235
 境界の問題に関しては、次の著書で簡潔に整理されている。
 中村和郎・手塚 章・石井英也共著『地域と景観，地理学講座 4』古今書院，1991年，第 4 章 境界（中村和郎）
 地理学者の果すべき役割に関しては、次の著書・論文が参考になる。
 B. J. L. Berry 「Creating Future Geographies」 A. A. A. G., Vol. 70, No. 4, 1980
 R. F. Abler 「What Shall We Say? To Whom Shall We Speak?」 A. A. A. G., Vol. 77, No. 4, 1987
 竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ： Experiences of Sixteen Senior Geographers』古今書院，1986年
 西川 治「地理学の開明的役割と地泰学」地理学評論，Vol. 62 (Ser. A), No. 11, 1989
 24) 気候学者のマルトヌは、ある時代の地理学者の仕事として、次の点を挙げている。
 「地理学者は諸要因の場所的な組み合わせを考察することになる。そして、その組み合わせの複雑さたるや、物理学者や植物学者や統計学者の想像をはるかに超えている。地球の表面は、地理学者の実験室であり、また素晴らしい経験の場である。そこには驚くほど多様な地域類型が存在している。それらの特質を認識し、また、その特質を説明することが地理学者の仕事にはかならない。」
 マルトヌ「地理学の歴史」1929, 手塚 章編『地理学の古典』所収，古今書院，1991年，p. 357

参 考 文 献

- P. George 『Panorama du monde actuel』 P. U. F., 1965
 J. A. May 『Kant's Concept of Geography』 Univ. of Toronto, Department of Geography, Research Publication, 1970
 A. Frémont 『La région, espace vécu』 P. U. F., 1976
 Yi-Fu Tuan 『Space and Place』 Univ. of Minnesota, 1977
 P. Gould 「Letting the Data Speak for Themselves」 A. A. A. G., Vol. 71, No. 2, 1981
 R. J. Johnston 『Philosophy and Human Geography, An Introduction to Contemporary Approaches』 Edward Arnold, 1983
 R. J. Johnston ed. 『The Future of Geography』 Methuen, 1985
 P. Claval 「Nouvelle géographie, communication et transparence」 Ann. de Géogr., No. 522, 1985
 W. Warntz 「Newton, The Newtonians, and the Geographia Generalis Varenii」 A. A. A. G., Vol. 79, No. 2, 1989
 E. Relph 「Responsive Methods, Geographical Imagination and the Study of Landscapes」 A. Kobayashi et al. ed. 『Remaking Human Geography』 Unwin Hyman, 1989
 I. G. Simmons 『Changing the Face of the Earth, Culture, Environment, History』 Basil Blackwell, 1989

R. J. Johnston 「What Can I Do With a Geography Degree ?」 Teaching Geography, October, 1990

Yi-Fu Tuan 「Realism and Fantasy in Art, History, and Geography」 A. A. A. G., Vol. 80, No. 3, 1990

本稿脱稿後、次の論文を入手した。内容の検討は別の機会に譲りたい。

J.K.Wright 「Terra Incognita : The Place of the Imagination in Geography」 A. A. A. G., Vol. 37, No. 1, 1947

A Reflection on the Geographical Thinking and the Geographical Imagination

Yukihiko OHDAKE*

ABSTRACT

The object of this research is to consider the problems of the geographical thinking and the geographical imagination on the basis of domestic and foreign bibliographies.

The interval of publications of geographical books and theses is shortened, but their numbers increase, as if it corresponds to the efficiency and speed-up of production within capitalism. Therefore, researches are conducted under the same pattern in general and they tend to lack in ideas and creativity which are essential to researches. The author has analysed the factors of difficulties in the geographical thinking and the geographical imagination, and also analysed the process to reach them.

* Division of Social Studies